

ヴァージニア・ウルフ再考
仮説としての「内面」

難波江 和英

Summary

Modernist Assumption of "Life Within"

Kazuhide Nabae

Many scholars and critics have discussed Virginia Woolf and her literature under the assumption that a human being has the "inner" realm of being. They take it for granted that the locus of life is embedded "within" a human being, ready to emerge as a presence apart from the "outer" world. This paper challenges the truism of "life within" through a reading of "Modern Fiction" and demonstrates a new reading of *Orlando* with the idea in mind that the "inner" realm of being is a metaphysical construct founded on the dualism of inside and outside. It will become clear on analysis that Woolf can secure the "inner" realm of being only when she can call for, only to disclaim, the "outer" realm of being which her literary rivals, what she calls "materialists," allegedly draw on.

I

ヴァージニア・ウルフ（1882-1941）は、死後50年あまり経った今もなお「意識の流れ」の作家として知られている。ウルフの文学を考えるにあたって、彼女が人間の生をどう表現したのか、それを人間の「内面」に照らして問題にするのが、あいかわらず常識のように思われている。しかし常識には必ず、それを支えるのに都合のよい原理が選択されて備わっており、その原理を脅かすおそれのある原理は、無自覚に、あるいは無自覚を装って巧妙に、常識から排除されている。この選択と排除の仕組を問題にすることなく、常識を鵜呑みにして議論を進めるのは、方法論として限界がある。

今ここで問題となるのは、人間の「内面」に関する常識である。つまり、人間には「内面」と呼ばれるものがあるという常識である。その常識に従えば、あたかも「内面」が事物のように人間のなかに隠されていて、発見されるのを待っているという見方を肯定することになる。しかし「内面」は、確固たる事物として人間に最初から与えられているものでもなければ、ましてや発見されるものでもなく、あくまで人間によって構築された仮説にほかならない。それゆえ「内面」は、人間のなかにあるのではなく、その仮説を構築しようとする人間の方法に応じて現われてくるものにすぎない¹⁾。

ウルフが人間の生をどう表現したのか、それを人間の「内面」に照らして考えるという観点に立つかぎり、万人に共通した「内面」の存在を当然視したところからしか議論が始まらない。それでは常識の固定した人間観から逃れられない。ウルフが小説を書くに際して、すでに人間の「内面」が表現すべき対象としてあったわけではない。ウルフが「内面」という仮説を自分なりに構築したからこそ、その構築の方法に応じて、彼女の創造する人物たちの「内面」が現われたのである。問題とすべきは、ウルフが人間の「内面」を対象として、それをどう表現したかではなく、そもそも彼女が、どういう原理のもとに人間の「内面」という仮説を構築したかである。

その問題を考えるにあたって、人間の「内面」をあくまで仮説として念頭に置きながら、ウルフが『普通読者』（1925）に収録した「現代小説論」（“Modern Fiction”）を精読してみるのには有効である。この論考において、ウルフがH・G・ウェルズやアーノルド・ベネット、それにジョン・ゴールズワージーを批判しながら、新しい作家として自分自身の立場を力説するとき、その「新しさ」の根拠としたのが、ほかならぬ「身体」に対する「精神」の優位だからである。

If we tried to formulate our meaning in one word we should say that these three writers are materialists. It is because they are concerned not with the spirit but with the body that they have disappointed us, and left us with the feeling that the sooner English fiction turns its back upon them, as politely as may be, and marches, if only into the desert, the better for its soul.²⁾

ここでウルフは、先に挙げた3人の作家たちを、人間の「精神」より「身体」に関心を寄せる「物質主義者」であるとして、かれらの文学の方法を退ける。先行する秩序を否定して、それを乗り越えることで新しい秩序を創ろうとする欲望をモダニズムと規定するなら、ウルフの標榜した「現代小説」(modern fiction)とは、まさにそのモダニズムの産物である。それも「身体」と「精神」というデカルト流の二項対立を踏襲したモダニズムである。それでは、ウルフの区分した「身体」と「精神」とは何を意味するのか。それを知るためにも、もう少し「現代小説論」を読み進めておかなければならない。

ウルフには、3人の異なる作家たちを「物質主義者」として総括する危険が充分わかっている。それにもかかわらず、彼女は「物質主義者」を総称として利用しながら、あえて同時代の有名な作家たちに共通する文学の方法を問題にする。ウルフによれば、ウェルズは善良すぎて、「政府の役人たちが遂行するべきだった仕事を背負ってしまい」、自説や事実を盛り込むあまり、自分の創造した人物たちが「無骨で粗野」に墮していることを認識していない³⁾。ゴールズワージーについても、ウルフはその「誠実さと人間らしさ」を称賛するものの、やはり「われわれの捜しているものは、かれの書物にも見つからないだろう」と落胆を隠さない⁴⁾。ベネットにいたっては、あまりにも「本を巧みに構築し、確固たるものにする」ため、かれの作品には欠陥もないかわり、人間の生も見あたらないとして、ウルフはかれを最悪の「物質主義者」と断定する⁵⁾。

いずれの場合にも、ウルフが「物質主義者」として批判するのは、しっかりした実在として人間を表現する文学の方法を順守するあまり、かえって人間の生を硬直させている作家たちである。それゆえ、かれらが「身体」を重視するといっても、それは必ずしも物質としての人間のことでない。むしろ、あるまとまりをもつものとして了解され、構成された人間のことでない。いや、人間ばかりではない。その人間観に立脚した「物質主義者」にとっては、人間のみならず、その生もまた、あるまとまりをもつものとして了解され、構成される。たとえば「筋」として、あるいは「喜劇、悲劇、恋愛関係」として⁶⁾。

無論ウルフは、これらの文学の約束事を虚偽と見る。しかし、それに目を奪われてはならない。問題の本質は、ウルフが「身体」に依拠した人間観を仮定することによって、その人間観に収まらない人間の相を現わしめたことにある。その相においては、もはや人間が、あるまとまりをもつものとして了解されたり、構成されたりすることはない。その結果、「筋も、喜劇も、悲劇も、恋愛関係や大惨事もなくなるだろう」⁷⁾。この人間の相こそ、ウルフが「精神」と呼ぶものである。忘れてならないのは、ウルフの称揚する「精神」が、最初から自律したしたものとしてあったわけではないということである。それはあくまで、彼女が「身体」を古い秩序と見なし、その枠組を越えた人間の相を開くために、新しい秩序として構築した仮説にほかならない。それではウルフは、どういう原理のもとに「精神」の相を構築したのか。

Look within and life, it seems, is very far from being "like this." Examine for a moment an ordinary mind on an ordinary day. The mind receives a myriad impressions—trivial, fantastic, evanescent, or engraved with the sharpness of steel.⁸⁾

ウルフが直感する人間の生は、「ささやかな、空想にあふれた、はかない、あるいは鋭い鋼で刻みこまれた無数の印象」から成る。一見してわかるとおり、この生には、あるまともをもつものとして了解され、構成された人間の生と相反する諸価値が、原理として与えられている。つまり、「身体」に依拠した「物質主義者」の人間観が、「堅固」(“solidity”)や「全体」(“the whole”)を原理としたのに対して⁹⁾、「精神」に依拠するウルフの人間観は、「軽微」や「希薄」を原理としている。それゆえ、人間の生を何らかの原理に即して構成したのは、「物質主義者」ばかりではない。もしかれらが人間の生を「このようなもの」(“being ‘like this’”)として、すなわち整然とした実在として構成したとすれば、ウルフはそれを「光を放つ暈輪、意識の始めから終わりまで、われわれを包んでいる半透明の被膜」¹⁰⁾として、すなわち流転する微粒子の帯として構成したのである。

ウルフは人間の生の実態を説明しようとして、「内側を御覧なさい」(“Look within”)と訴える。そのとき、彼女が肯定した「精神」の相は、この「内側」なる架空の領域に包摂される。他方、彼女が否定した「身体」の相は、その「内側」と接するように浮かびあがり、おのずから「外側」として排斥されることになる。かくして、ウルフの「精神」の相は、人間の「内面」に還元され、彼女の「身体」の相は、人間の「外面」に還元されてしまう。ウルフにとって、「外面」と「内面」は、まったく異質の仮説であったかもしれないが、人間の生を考える原理として見れば、それらは「身体」と「精神」という二項対立の言説から派生した異形にすぎない。

ウルフが示唆したように、たしかに「物質主義者」は「外面」に固執したかもしれない。しかし、「物質主義者」と呼ばれた作家たちにも、かれらなりの「内面」の相はあったと考えられる。それにもかかわらず、「現代小説」におけるウルフは、「物質主義者」の「内面」の相を論証することなく、かれらの「外面」の相を強調する。その結果、彼女は「物質主義者＝外面」という公式を常識として定着させる。つまるところ、「外面」に固執したのは「物質主義者」ではなく、その「外面」の相なくして独自の「内面」の相を形成しえなかったウルフ自身である。

それでは、ウルフが「内面」という仮説を構築した方法に応じて、彼女の創造する人物たちの「内面」は、どのように現われたのか。その問題を考えるに際して、ウルフが1928年に出版した『オーランドー』は、適切な手段を与えてくれる。副題が「伝記」となっていることから窺えるように、この作品には、オーランドーなる人物の「内面」が、伝記を方法として構成されているからである。

II

ウルフは『船出』(1915)を出版してから、『夜と昼』(1919)、『ジェイコブの部屋』(1922)、『ダロウェイ夫人』(1925)、『灯台へ』(1927)と、立て続けに新しい小説を発表した。ひとつには、深刻な仕事の緊張から解放されるために、「冗談」¹¹⁾として書き始められたのが『オーランドー』である。たしかにウルフは、それを書き進むにつれて興に乗り、本気になってしまったとはいえ、この作品ほど、彼女の空想が時空を越えて飛翔する感覚を軽やかに伝えてくれるも

のではない。エリザベス朝には美少年として女王の寵愛を受け、17世紀末には男から女に変身し、18世紀には社交会に姿を現わして文士たちのパトロンになり、19世紀にはヴィクトリア朝の「時代精神」¹²⁾に侵されながら結婚もして、しかも「1928年10月11日木曜日」¹³⁾現在、今なお36歳の詩人として生きている。それがオーランドーその人である。

この奇想天外な主人公もさることながら、『オーランドー』には、他にも多彩な解釈をゆるす相が幾つも備わっている。たとえば、時間、時代、歴史、社会、文化、芸術、伝記、文学、思想、性と、枚挙にいとまがない。この作品では、これらの諸相が矛盾することなく共存して、16世紀から20世紀にわたる時代なり社会なりに特有の現象を映し、オーランドーという人物をその総体として、つまり一種の時空のパノラマとして構成する。それはウルフが、ひとりの人間を共時的かつ通時的なものとして、また多面的かつ多層的なものとして把握することによってこそ、その人間の「内面」を構成できると考えていたことを傍証する。彼女にとって、伝記はその目的を達成するための格好の方法である。

しかし伝記という方法にも、問題がないわけではない。『オーランドー』に現われる伝記作家は、ウルフになりかわって、それを説明する。

Often the paper was scorched a deep brown in the middle of the most important sentence. Just when we thought to elucidate a secret that has puzzled historians for a hundred years, there was a hole in the manuscript big enough to put your finger through. We have done our best to piece out a meagre summary from the charred fragments that remain; but often it has been necessary to speculate, to surmise, and even to make use of the imagination.¹⁴⁾

ピュータリン革命とロンドンの大火のため、オーランドーの活躍を記録した資料が、損傷したり消滅したりしてしまった。そこで伝記作家は、焼け焦げた文書の「断片」を繋ぎ合わせて、貧弱ながらもオーランドーの業績について結論を得ようと最善を尽くしたが、力及ばず、致し方なく思案や憶測さらには想像力を逞しくするはめになった、というわけである。オーランドーに関する文書の「断片」を可能なかぎり寄せ集め、それでも足りないところは創意で補うという伝記作家の態度は、滑稽に書かれてはいても、やはり極めて重要である。この態度からは、事実を尊重しながらも、虚構の力を働かせて、その人間の「全体」を回復しようとする伝記作家の意志が窺えるからである。

ウルフは『オーランドー』を執筆していた1927年10月22日の日記で、「事実と空想のバランスに気をつけなければならない」と書いている¹⁵⁾。彼女が懸念していたのは、「ヴィタ、ヴィオレット・トレフュシス、ラセラス卿、ノール」¹⁶⁾といった題材と、その題材から浮遊した想像の産物との均衡である。それから約一週間後の10月30日、ウルフは「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン」に「新しい伝記」という評論を掲載した。そこでも彼女は、20世紀の伝記について、「現実と空想の風変わりな融合」がなければならないと書いて、先の日記での主張を繰り返している¹⁷⁾。ウルフによれば、今世紀の伝記には、「花崗岩のように堅固なもの」(事実)と「虹のように掴みにくいもの」(空想)とが、「継ぎ目のない全体」として共存していなければなら

ない¹⁸⁾。事実の尊重、想像力の行使、そして何よりも、虚実が奇妙に混淆した「全体」として人間を構成しようとする意志、これらが、ウルフと『オーランドー』の伝記作家に共通した「新しい伝記」の基本原理である。

それでは、『オーランドー』の伝記作家は、どのような原理を用いて、主人公の「内面」を構成したのか。それを考えるに際して、この伝記作家が、人間の「自己」(self)に強い関心を示していたことは見逃せない。そもそも『オーランドー』において、伝記作家が「自己」を問題としたのは、主人公が20世紀を迎えてからのことである。これはウルフが「現代小説論」において、人間の「内面」を今世紀の問題として提唱したことと符号する。

"All right then," Orlando said, with the good humour people practise on these occasions; and tried another. For she had a great variety of selves to call upon, far more than we have been able to find room for, since a biography is considered complete if it merely accounts for six or seven selves, whereas a person may well have as many thousand.¹⁹⁾

ひとりの人間には、幾つかの限られた「自己」しかない、というのは浅見である。実のところ、人間には、従来の伝記に収まりきらないほど多彩で多数の「自己」がある。それゆえ、オーランドーが「まさにこの自己」("this particular self")²⁰⁾に飽きて、「別の自己」("another")を望むとしても、それは理にならなっている。千変万化する「自己」の変遷を記録するのが、何よりも「新しい伝記」の使命である、と伝記作家は考える。この論理に従えば、ひとつの、しっかりした、「まさにこの自己」を特別視するのは、いわゆる「物質主義者」の発想ということになる。かれらの人間観が、単一の「自己」(Self)を仮説として構成されているとすれば、ここに見る伝記作家のそれは、無数の「自己」(selves)を仮説として構成されている。しかも、その無数の「自己」は、「給仕が片手で捧げもつ皿のように重なりあって」²¹⁾、われわれ人間を構成している、という念の入れようである。

ここで問題となるのは、『オーランドー』の伝記作家もまた、単複の差こそあれ、従来の「自己」という仮説を継承していることである。それゆえ、この伝記作家は、オーランドーの「内面」を構成するにあたって、「自己」を仮説とする人間観から逃れられなかった。つまり、オーランドーの「内面」は、16世紀から20世紀まで増殖し続ける「自己」の累積として構成されるしかなかった。たとえば、「土人の首を切り落とした少年、それを吊るし直した少年、丘に坐っていた少年、その詩人を見た少年、あの女王に薔薇水を捧げた少年」として、あるいは、「サーシャを恋した青年」、「宮廷人」、「大使」、「軍人」、「旅人」として、さらには性を転換して、「ジブシー、貴婦人、世捨人、人生を恋する乙女、文学のパトロン」として²²⁾。この展開は、オーランドーが「自己」を増殖しながらも、その無数の「自己」を統制する究極の「自己」を実現するにいたるまで続く。

The whole of her darkened and settled, as when some foil whose addition makes the round and solidity of a surface is added to it, and the shallow becomes deep and the near distant; and all is contained as water is contained by the sides of a well. So she

was now darkened, stilled, and become, with the addition of this Orlando, what is called, rightly or wrongly, a single self, a real self.²³⁾

いかにオーランドーが欲しても、決して実現しなかった「本当の自己」(“the true self”)²⁴⁾が、ふいに彼女のものとなる瞬間である。そのとき、オーランドーの「全体」(“the whole”)は、表面が丸く固くなったように、暗く静まり、浅きは深く、近きは遠くなって、泉の内側に水が湛えられるように、オーランドーをオーランドーたらしめている「すべてのもの」が収まる。そのオーランドーのありかたを、伝記作家はひとまず、「単一の自己」もしくは「真の自己」と呼ぶ。

ここで重要なのは、オーランドーのありかたが、ひとつの「全体」として仮定されていることに留まらない。むしろ、伝記作家が主人公をひとつの「全体」として仮定し、その「全体」を深淺と遠近を原理として空間化していることを忘れてはならない。それゆえ、オーランドーの究極の「自己」は、深さと奥行を備えた容器のように、3次元の広がりを与えられる²⁵⁾。しかし、「全体」を原理として、人間をあるまとまりをもつものとして了解し、構成したのは、ウルフが批判した「物質主義者」ではなかったのか。

たしかに『オーランドー』の伝記作家は、この大団円で「物質主義者」の人間観に接近して、オーランドーの「内面」を構成したように見える。その理由は、はたして何だったのか。それを知るためには、伝記作家が「単一の自己」もしくは「真の自己」を問題にする直前、オーランドーが20世紀のロンドンの街を車で走り抜けながら、ある奇妙な感覚に襲われていたことを思い起こしておく必要がある。

Nothing could be seen whole or read from start to finish. What was seen begun—like two friends starting to meet each other across the street—was never seen ended. After twenty minutes the body and mind were like scraps of torn paper tumbling from a sack and, indeed, the process of motoring fast out of London so much resembles the chopping up small of body and mind, which precedes unconsciousness and perhaps death itself that it is an open question in what sense Orlando can be said to have existed at the present moment.²⁶⁾

あまりにも車が速すぎて、周囲の光景が飛び去り、オーランドーは、何ひとつとして「全貌」(“whole”)を把握できない。たとえ事の始まりはわかっても、その終わりまで見届けられない。もはやオーランドーには、あるまとまりをもつものとして世界を構成できない。しかも断片化したのは、世界ばかりではない。オーランドーの世界が断片化するにつれて、彼女の「身体と精神」もまた、「紙片」のように、そのまとまりを失ってしまう。オーランドーが世界を構成し、構成された世界が、オーランドーを構成していたはずなのに、その相関関係が機能しなくなる。それは「心身を切り刻む」ような経験として、「無意識そしておそらく死そのもの以前」の虚無を窺わせる。それゆえ、オーランドーなる人間が、この瞬間、はたして存在していると言えるのかどうか即断できない、と伝記作家は表現する。

このレトリックは巧妙である。まず伝記作家は、「始めから終わりまで」を見渡せる世界を

「全体」として仮定する。続いて、その「全体」を断片化して見せる。これにより、あるまとまりをもつものとして世界を了解し、構成した「物質主義者」の「身体」の相は否定される。それに代わって、ウルフの称揚した「精神」の相が、開かれたかに見える。しかし、その瞬間、オーランドの「精神」は、「身体」もろとも裁断されたような感覚に晒される。その結果、彼女の人間としての存在は、彼女の構成した世界が崩壊するのに呼応して、消滅の危機に頻することになる。つまり伝記作家は、「身体」の相から「精神」の相へと表現を移すかに見えながら、「身体」と「精神」の二項対立を崩し、その裂け目から「無意識そしておそらく死そのもの以前」の次元を開いてしまう。オーランドが心身を区分する感覚を奪われて、存在を無化しそうな瞬間、伝記作家は束の間、心身の二項対立に依拠したモダニズムの言説を越える。

存在の危機に直面したオーランドが、無数の自己を統制する「ひとつの自己」²⁷⁾を欲したのも、そして「単一の自己」あるいは「真の自己」を実現したのも、人間が人間であり続けようとする際に働く防衛機構ゆえに見える。しかし、それでは、「自己」の問題を心理学に還元しただけの解釈に終わる。むしろ、伝記作家がオーランドの「内面」を構成した原理から、その問題を考えておかなければならない。つまり、オーランドが理想の「自己」を実現できたのは、結局、伝記作家が破綻のない世界と人間のありかたを「全体」として仮定し、その「全体」を崩壊させる局面を展開して、あらかじめ喪失された「全体」を回復しようとする人間の欲望を仕立てたからである²⁸⁾。しかも、この伝記作家は、オーランドの回復した「全体」が、「幻想」にすぎないことをも自覚している。

...and then green screens were held continuously on either side, so that her mind regained the illusion of holding things within itself and she saw a cottage, a farmyard and four cows, all precisely life-size.²⁹⁾

Denis Brownによれば、英文学において、人間を「まとまりのある、統一されたものにする圧力」(“an integrating, unitary pressure”)³⁰⁾が働いたのは、17世紀の頃、ミルトンの時代のことである。ウルフが「物質主義者」として批判したのは、その「圧力」のもとに人間を表現し続けた同時代の作家たちである。たしかにウルフも伝記作家を介して、オーランドが心身の断片化から人間存在の危機を経て、その「全体」を回復する過程を表現している。しかし、オーランドの回復した「全体」は、「物質主義者」の考えていた「全体」とは異質である。そもそも『オーランド』の伝記作家は、すでに見たように、「全体」という事態を「幻想」と見抜いている。つまり「全体」とは、その「全体」を構成する原理（たとえば知覚の機能）に応じて、束の間、現われたものにすぎない、というわけである。さらに、この伝記作家は、主人公の「全体」に3次元の広がりを与えたとしても、それを終始「まとまりのある、統一された」ものとして観察し、表現したわけではない。

All this, the trees, deer, and turf, she observed with the greatest satisfaction as if her mind had become a fluid that flowed round things and enclosed them completely.³¹⁾

オーランドが「単一の自己」あるいは「真の自己」を実現して、その「全体」を回復した直後の状況である。伝記作家によれば、主人公の「精神」は、周囲を流れて、事物を包みこむ

かに見える。すなわち、オーランドーの「精神」は、「木々」や「鹿」や「芝生」という固体の差異を包摂し、消滅させる「流動」として表現されている。この「流動」は、人間としての輪郭をオーランドーから奪いながら、その代償として、生が拡張する感覚そのものへと彼女を昇華する。それゆえ、オーランドーが「全体」を回復する瞬間、彼女の知覚は、固体の領域を越えて発動し、昂揚する。

オーランドーが館に帰り、「完璧な全体」(“one and entire”)³²⁾になるときは、特に視覚が鋭敏になり、肉眼では考えられないほど、事物が鮮明に、しかも克明に見えるようになる。オーランドーには、「花壇の土の一粒一粒」、「木という木の絡み合う小枝」、「草の葉の一枚一枚」、「葉脈や花卉」、「ゲートルの釦一つ一つ」、さらに馬の「額の白星」や「3本の長い毛」にいたるまで、あたかも眼に「顕微鏡」を填めたように、ありありと見える³³⁾。オーランドーの視線を介して、見ている彼女が、見られている事物に到達して、その事物になってしまったかのようなのである。しかし、主体と客体の境界は、まだかろうじて残されている。

その境界が消滅するのは、オーランドーが、庭師ジョー・スタッブズの右手の親指を見た瞬間である。そこには「爪」がなく、「爪」のあるべきところには「桃色の肉」が盛りあがっている³⁴⁾。Makiko Minow-Pinkneyによれば、「爪」は「外側の固い甲殻」としてあり、「桃色の肉」は「傷つきやすい内側」としてある³⁵⁾。つまり、ここでは、「爪」(外側)に覆われているはずの「桃色の肉」(内側)が、突如、その裸形を露呈して、外側と内側の境界を攪乱していることになる。それゆえオーランドーは、世界を構成する二項対立の原理を象徴的に失い、世界は再び、外側も内側もない次元で揺れ始める。

そのときオーランドーには、「何もかもが幾分、他のものに変貌する」かと思われる³⁶⁾。たとえば、「牛」が「羊」に思えたり、「スミスという老人」が「ジョーンズという老人」に思えたりする³⁷⁾。つまり、動物の種類や人間の個人を区別している差異が、おぼろになり始める。その結果、「サーペンタイン池のおもちゃのボート」まで、やがて「夫の乗る帆船」に見えてくる³⁸⁾。それらがともに、「千の死の白波のアーチ」を越えて進むからである³⁹⁾。ここでオーランドーは、「ボート」と「帆船」の主体としての特徴を同一視しているというより、むしろ「ボート」と「帆船」に共通した、死を乗り越える運動の特徴に導かれて、そこから双方の主体を同一視している。つまりオーランドーの知覚は、ここでも、事物の差異を強調する「固体」の原理を逃れて、その差異を消滅させる「流動」の原理に依拠している。

伝記作家が「流動」の原理に依拠して、オーランドーの世界を構成したからこそ、彼女には、「ものが近づいては遠ざかり、混じりあっては離れ、たえまなく光と影が移ろうなかで、世にも不思議な結びつきや組み合わせを見せる」ように感じられたのである⁴⁰⁾。接近、離反、混合、分離、結合、組成。この渾沌として、しかも自由で変化に溢れた世界の流転は、そのままオーランドーの生のありかたを構成する。それは「物質主義者」の「身体」を原理としているかぎり、決して表現されることのなかった人間の生態である。しかし、それはまた、伝記作家が「物質主義者」の「身体」を原理として踏まえ、その限界を越えないかぎり、決して表現されることのなかった人間の生態でもある。オーランドーの「内面」は、その生態を究極の原理として

構築された仮説にはかならない。

(本稿は、神戸女学院大学研究所1993年度研究助成金による研究成果である。)

註

- 1) 1960年代以降の現代思想の興隆を背景にして、西欧の批評家は、「自己」(self)や主体(subject)を改めて問題にするようになった。しかし、かれらの大多数は、「自己」や「主体」を徹底して懐疑することもなく、あるいはまた、それらの仮説をそのまま「内面」と同一視したりして、「内面」の制度そのものを問題にしない。たとえばIrving Howeは、「自己」("the self")を仮説と見なした上で、それが(西欧では)「内側」として受けとめられてきたことを、次のように説明している。
"Let us say that the self is a construct of mind, a hypothesis of being, socially formed even as it can be quickly turned against the very social formations that have brought it into birth. The locus of self often appears as 'inner'..." ("The Self in Literature," *Construction of the Self*. Ed. George Levine. New Jersey: Rutgers UP, 1992) しかし、そのHoweでさえ、"mind"もまた、ひとつの「構築物」("construct")であり、「仮説」("hypothesis")にすぎないことを指摘することができない。それに比べて、日本の批評家には、「内面」の制度に対する問題意識がより強く見られる。比較的新しい成果として、たとえば、柄谷行人の「内面の発見」(『日本近代文学の起源』収録)や、竹田青嗣の「文学的〈内面〉のゆくえ——女流作家の現在」(『〈世界〉の輪郭』収録)がある。しかしまた、こうした批評が書かれるということは、これまで日本において、「内面」の制度が徹底して懐疑されてこなかったことをも示唆している。
- 2) Woolf, Virginia. *The Common Reader: First Series*. London: The Hogarth P, 1968. 185-6.
- 3) Ibid. 187.
- 4) Op. cit.
- 5) Ibid. 186.
- 6) Ibid. 188.
- 7) Ibid. 189.
- 8) Op. cit.
- 9) Ibid. 188.
- 10) Ibid. 189.
- 11) Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf: Volume III 1925-1930*. London: The Hogarth P. 1980. 177.
- 12) Woolf, Virginia. *Orlando*. London: The Hogarth P, 1978. 213, 219, 220, 238, 239.
- 13) Ibid. 295.
- 14) Ibid. 110.
- 15) Woolf. *The Diary of Virginia Woolf: Volume III 1925-1930*. 162.
- 16) Op. cit.
- 17) Woolf, Virginia. *Granite & Rainbow*. London: The Hogarth P, 1960. 155.
- 18) Ibid. 149.
- 19) Woolf. *Orlando*. 278.
- 20) Ibid. 277.
- 21) Op. cit.
- 22) Woolf. *Orlando*. 278.
- 23) Ibid. 282.
- 24) Ibid. 279.
- 25) たとえばShirley Panekenは、この箇所を引用しながらも、「全体」の概念は言うまでもなく、「自己」の概念も、さらには「意識」の概念さえも自明のものとして、議論を進める。"Losing

- consciousness of self, Orlando hoped to achieve a complete self ..." (*Virginia Woolf and the Lust of Creation*. Albany: State U of New York P, 1987. 176.)
- 26) Ibid. 276.
- 27) Ibid. 279.
- 28) Makiko Minow-Pinkney の *Orlando* 論は、オーランドーの「自己」の変遷を丁寧に分析して、示唆に富む。ただし、この問題の箇所では、ラカンの「鏡像」を単純に援用したため、幼児の「自己」形成をオーランドーの「自己」形成に重ねただけに終わっている。"As the baby first gains control of its motility and then constructs the self as a unitary whole by identification with its mirror image, so Orlando regains the 'illusion' of a total self by the 'green screens' of the Kent countryside." (*Virginia Woolf & The Problem of the Subject*. Brighton: The Harvest P, 1987. 148.)
- 29) Ibid. 276.
- 30) Brown, Dennis. *The Modernist Self in Twentieth-century English Literature*. New York: St. Martin's P, 1989. 2.
- 31) Woolf. *Orlando*. 282.
- 32) Ibid. 288.
- 33) Op. cit.
- 34) Ibid. 289.
- 35) Minow-Pinkney. *Virginia Woolf & The Problem of the Subject*. 150.
- 36) Woolf. *Orlando*. 290.
- 37) Op. cit.
- 38) Ibid. 294.
- 39) Op. cit.
- 40) Ibid. 290.

(原稿受理 1994年4月19日)